

フィリピンとの掛け橋

第11号 日本聖公会九州教区フィリピン協働委員会発行

2007年4月16日

ワークキャンプ特集



3月15日(木)反省会で記念撮影

今年も教区から8名を派遣

九州教区は、協働関係にあるフィリピン中央教区へ、3月6日(火)～16日(金)、4回目のワークキャンプのために8名を派遣して、同教区のヌエバ・エシハ州の州都カバナトゥアン市カブにある聖アンデレ教会(セント・アンドリュー)とパラヤン市パラレの聖ダビデ教会(セント・デイビッド)2箇所に分かれて働いた。その後、フィリピン聖公会の発祥の地であるマウンテンプロピンス(山岳州)を訪問し、フィリピン中央教区の牧師たちの出身地の文化を学んだ。

参加者 小林史明司祭(団長・熊本)(以下五十音順に)沖本恭子(久留米)柴本啓志(久留米)古澤はん奈(大分)松山省太郎(戸畑)眞子義人(大阪聖贖主)山口明美(久留米)山本友美(久留米)

キャンプ日程

3月6日(火)
午前10時10分福岡空港発、中華航空で台湾乗換え、午後3時55分(現地時間・日本より1時間遅れている)マニラ空港着。中央教区事務所で歓迎夕食会に出席し、

敷地内にある宿泊施設ホレブハウスに宿泊。

7日(水)
朝食後、パラヤン市の聖パウロ教会に行く。昼食後、セント・デイビッドグループ(以下DG)とセント・アンドリューグループ(以下AG)に分かれて各キャンプ地へ向かう。DGはロメル司祭が指導。AGは、ジェームズ司祭が指導。

8日(木)
DGは、礼拝堂内の壁塗り。午後は村を訪問後牧師館の屋根塗り。AGは、牧師館の壁と屋根を塗る。

9日(金)
DGは早朝、牧師館の屋根の仕上げ塗り。午前中に聖マリア教会を訪問。AGは、DGのパラレを訪問。一緒に昼食を食べた後、明日行われる結婚式の披露宴会場を見学。その後、AGは、キャンプ地に帰る。

10日(土)
DGは、朝食に招かれ、昼は結婚披露宴会場へ。午後は子ども達と遊ぶ。AGは、仕上げの作業、夜礼拝。

11日(日)
DGは、教会で礼拝、その場で日本の歌、折り紙など交流。午後は晚餐の準備。AGは、聖ヨセフ教会で礼拝後、サンホセ市に移動。夜は聖マルコ教会で礼拝。

12日(月)
サンホセ市のショッピングセンターで合流。イフガオ州ナヨンの聖ヨハネ教会で昼食時、ここに滞在中の立教大学のグループと出会う。バナウェのライステラスを見学後、ポントックの諸聖徒大聖堂を訪問。サガダで宿泊

13日(火)
サガダの聖マリア教会、聖マリアハイスクールを訪問後、洞窟探検。昼食後はビスオの聖ベネディクト教会、聖ヤコブハイスクール訪問。聖アンナ教会を訪ねて、ビスオのロメル司祭の親戚の家に宿泊。

14日(水)
朝、サガダで買い物後、パウコの森の聖マリア教会で昼食。バギオに着くと、織物工場兼土産物屋へ。スーザンさんの家で食事。フィリピン北中央教区の復活大聖堂にある、エリザベス・ゲストハウスに宿泊。

15日(木)

6人はバスで、2人は中央教区の車に乗って、マニラへ帰る。近所で買い物の後、送別夕食会。その後有志はネット司祭の家で過去のキャンプの写真などを見る。

16日(金)

朝からマニラ空港へ。午前10時45分発で台北へ。4時間の待ち時間の後、福岡へは午後7時50分着。出迎えの人々と会い、それぞれ帰途に着く。

キャンプの前と後

尚、2月11日(日)~12日(月)参加者による準備の話し合い。そして3月21日(水)参加者とフィリピン協働委員との報告反省会。それぞれ、久留米聖公教会で行われた。

目次

参加者の感想文

今年のワークキャンプを終えて	小林史明	2
フィリピンキャンプ2007	沖本恭子	3
二回目のフィリピンワークを終えて	松山省太郎	4
ワークキャンプに参加して	山口明美	4
フィリピン報告書	山本友美	5
義人のキャンプ日記	眞子義人	6
フィリピンワークキャンプ	古澤はん奈	9
初の外国フィリピンにて	柴本啓志	9
今後の展望とお知らせ		10

今年のワークキャンプを終えて

司祭 フランシス 小林史明

昨秋日本に来たロメル司祭の提案で、今回のキャンプは、例年のようなワークの後、ルソン島北部のマウンテンプロビンスなど、フィリピン聖公会発祥の地を訪問する11日間という長いキャンプになった。振り返ってみれば、私にとっては、懐かしい人々と再会したり、各地の人々と、24年前、私が神学生の時に滞在した時の写真などを見せて、親しく交わることができた、有意義な旅になった。

参加応募者に中学生や高校生があり、キャンプの責任者としては、彼らの安全などが気になり、二つのグループに分ける時、私のグループに入ってもらった。しかし、私の心配は全くの取り越し苦労で、パラレのセント・デイビッド・オブ・ウェールズ教会(4世紀後半、英国ウ

ェールズにいたデイビッド主教の名前をつけた教会)の人々は、私たちを暖かく迎えてくれ、英語を習う真っ最中の中高生は、親しく村の人々と語り合っ、キャンプを楽しんでいた。柴本君は、ふたつ年上の少年から日本語を教えるに頼まれ、いろいろ工夫しながら説明していた。この二人の少年たちが長い道を一緒に歩きながら話しているのを見て、私は彼らが国際人として交わりを深めている姿に感動した。そして、村の人々が帰って行った後、毎晩のように私たち4人は、長椅子を教会の広い庭に出して、その上に寝転がって、降るような夜空の星を眺めていた。すると、奇妙な声が毎晩聞こえてくるが、特に古澤さんは、その鳴き声のマネがうまくて、小学校の先生に、鳴きまねをして質問すると、それがトカゲだと知らされ、みんな驚いてしまった。



(24年ぶり訪問した学校で生徒たちに語る小林司祭)

参加者の中に50代の主婦がふたり参加して下さったのも、今回の特徴。第2回目にも2名の婦人会代表がいたが、今回は、村の人々と一緒にココナッツの実から果肉を削り取ったり、一緒に夕食を準備することになった。山口さんは、村の人々とテーブルを囲んで作業をするなど、村の生活に馴染んでいた。また、凧作りの作業では、紙を折った後、たくさんの糸やセロテープが必要になるが、彼女はせっせと裏方として、子ども達の作業がスムーズに進むように準備して下さった。

キャンプ後半は、毎晩宿舎が変わる旅になり、私は景色や人々との出会いを楽しめたが、若い眞子君と柴本君が、長時間の車の移動に、体調を崩したことは、今回の反省点だろう。特に、ワークを行った村からサガダまでの、休憩も入れてだが10時間近い移動は、途中の道が悪いことなど考えると、参加者には負担なのかもしれない。ロメル司祭は、来年もサガダなど訪問するなら、道

のいいバギオを経由するルートを往復してはどうか、と言ってくれた。また、この時期に中高生が参加するのはむずかしいなら、例えば8月の雨季に、植林のワークもあるが、という可能性も語ってくれた。

今まで、マリラケ伝道区などを中心にした、マニラから比較的近い地域で3年続けたワークは、ネッド司祭の司牧している教会だったが、それは一応終了した、ということで、今年はロメル司祭やジェームズ司祭の働く、ヌエバ・エシハ伝道区のワークになった。この伝道区では、他にもワークの希望が出ているので、同じ伝道区でまた働くと、村の人々とも継続的に交わりができる可能性がある。

私の個人的な課題としては、今年もルソン島北部の、イフガオ族(マウンテンプロビンスの隣の州)の昔話の本を購入したので、その翻訳をしたいこと。教会の名前に「セント・メリー・イン・ザ・フォーレスト教会(森の聖マリヤ教会)」という奇妙な名称が何度か出てきたが、実際、意味をその牧師に聞いても「私も調べたが、わからない。」という答えなので、それを調べたい、という気持ちである。

参加者の感想が集まったり、また秋には、フィリピンから司祭が誰か来る予定なので、いろいろ面白い交わりが展開することを期待している。

フィリピンワークキャンプ2007

沖本恭子

また今年も、独特な「もうわっっ」とした熱気に迎えられ、今回のキャンプが始まりました。今回はワークに加えて、フィリピン聖公会発祥の地を訪問する旅でした。帰国して思い起こしてみると、あれだけのハードスケジュールであったにもかかわらず、大きな怪我や病気もなく全員が無事に帰国できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。この10日間でたくさんのフィリピンを感じましたが、特に印象深かった事を挙げたいと思います。

(四季がない!!!)

これまでこのワークキャンプに参加していましたが、今回改めて発見したことがありました。それはフィ

リピンには「四季」がないということです。

3月12日から14日は世界遺産でもあるRice Terrace(棚田)を見ながらの移動でした。この風景は言葉ではなんとでもいい表わせない程とても素晴らしいものです。12日に見たRice Terraceは青々として上から見るとお茶畑のようです。しかし14日に見たものはマチュピチュの空中都市のような茶色いものでした。そうです、四季がないので同時期に田植えと稲刈りの光景を見ることが出来てしまうのでした。

このことに気づいた私は、その点に着目して辺りを観察していました。するとまた同じような光景に出くわしました。なんと、梨の実のなった木のまわりに菜の花が咲いていたのです!こんな感じで驚きの連続でした。

(道路事情)

それぞれの地でのワークを終え、合流してマウンテンプロビンスへ向かいました。その道は舗装されていないでこぼこ道で、縦に横に揺られての数時間に及ぶ移動でした。

日本は道路が整備されていて、このような揺れを感じる事はあまりありません。山奥の観光地へ行くにもトンネルを通してしまいます。フィリピンにはトンネルはなく、人の歩いた轍がそのまま道になった感じでした。

日本では味わうことのできない揺れをキャンプ中ずっと体感したことで、日本は恵まれていると思うと同時に、フィリピンののどかさというか、原始的な部分をうらやましくも思いました。

今年もフィリピンに行く事が出来たこと、変わらぬ笑顔に出会うことができたこと、素晴らしい経験ができたことなどたくさんの方に感謝しています。



(マウンテンプロビンスの民族衣装を着た沖本姉)

二回目のフィリピンワークを終えて



(カバナトゥアンの子どもたちと一緒にの松山兄)

松山省太郎

今回のフィリピンワークは昨年のものよりも充実し満喫できたと思います。二回目ということもあり少し余裕があったせいか、去年よりも多くの人と話をし、多くのことを得られました。去年は通訳を通しての会話しかしませんが今年はほとんど通訳に頼らずに交流できました。そのせいか、向こうの人たちと意思疎通がよくできました。異文化とか国際交流のようなものが大好きな自分にとってはいい経験ができました。Eメールアドレスも聞いたので近々送ってみようと思います。

ステイしたところでお世話してくれた人たちは自分たちのことをいつも一番に考ええてくれて本当に感謝です。食事とかもいつもじゃなかったけれどだいたい自分たち日本人にまず食べさせてくれて、後から別に食べていたようです。うまく英語もしゃべれず、向こうの人たちよりも決してタフではないけれどもいつも気づかってくれました。ちょうどいつも食事を作ってくれた方が誕生日だったので、プレゼントをあげることができても喜んでくれたのでお返しできてよかったです。

去年は2箇所しか訪れなかったけれど、今年はなんと中央教区を出て北の教区まで行き12箇所の教会に訪れました。北の教区のピサオというところはフィリピンに始めて聖公会が伝わったところらしく、北の教区は中央教区よりも聖公会が浸透しており、教会自体も大きく立派でした。この北の地方は中央教区の司祭さんたちの出身で、ジェームス司祭が育った家に行ったり司祭のお母さんにも会えたりもしました。遠いので何年かぶりに再会できたようでした。また、小林先生のここは24年

前に訪れたことがあるらしく、思い出に浸られたようでした。バギオではジェームス司祭とロメル司祭はどちらも久しぶりに家族に会えたようでした。今回はワーク以外でこのようなドキュメントがたくさんあり、かなり有意義だったのではないのでしょうか。

来年はもっと英語をマスターし今年よりももっとすばらしいフィリピンワークになるために努力をしたいと思います。

ワークキャンプに参加して

山口明美



(バウコの森の聖マリヤ教会で、松の木をくりぬいた説教台に隠れる山口姉)

初めて参加したワークキャンプ。台北を経由してマニラへ。寒かった福岡だったが、一気に、夏となりました。

主教様達のお出迎えにも、感謝でした。テレビで見た光景を、目の当たりにする事も出来、歓迎会の夕食も、すべて美味しく食することが出来ました。

二日目は移動で、二組に分かれて、ワークキャンプの部

落へ。夕方到着すると、牧師館裏にある、スターアップルという果物を取ってくださり、とっても美味しく、味はあけびを甘くしたような味でした。帰るまで食後の果物は、バナナ、パパイア、マンゴーと、日本では味わうことが出来ない贅沢なものでした。水は、日本の昔のポンプです。呼び水を入れ、てこの利用で汲み上げるものです。何をあいても、先ず水の確保です。

翌日、朝の涼しい時に礼拝堂の壁のペンキ塗りで、色はピンク。驚いてしまいました。日本だったら、あり得ない事です。ペンキが足りなくなり、中途半端に残ってしまいました。牧師館の屋根は、日中は暑くて大変なので、朝六時過ぎから頑張りました。朝露で濡れて、滑りやすく、ちょっと大変でした。

時間があると、地元の子供達と凧作りをし、揚げて遊び、暗くなっても元気に遊び回る、子供の視力の良さ、感覚の鋭さに、驚きました。日曜日の礼拝に参加し、折り紙の指導もし、皆さん熱心に折って、私達も汗かく程、力が入りました。

最初の夜から奇妙な泣き声に悩まされ、その後、それがトカゲの鳴き声とわかりました。本物を見たくて探しましたが、見つけることができず、残念でした。ワークキャンプ中に、庭の鶏が三羽食卓に登りました。極めつけは、最後の晩餐の山羊料理でした。現地では最高のもてなされたそうですが、先ほどまで草を食んでいた動物が、血の料理、皮の料理、胃液のスープと信じられない光景に仰天。昔は日本でも、そこそこあったことなんです、やはり驚きでした。

最後に、フィリピンと言え、ジャングルと暑さという私のイメージだったのですが、山々の木々はなく、無残な姿。日本の責任もあるのだろうか、と心が痛みました。

神様から遣わされ、働かせていただいたことに感謝いたします。



(ピサオの道端で、すぐに友達になる山本姉・中央)

フィリピンから帰国して二週間。

福岡空港では迎えてくれた長男夫婦と孫の顔を見て、緊張が緩み、縋って泣いてしまった。「宇宙から帰ってきたのじゃあるまいし、フィリピンだよ」と長男。「ともみさん、おかえりなさい」と涙を浮かべてくれるお嫁。「よくぞ元気で戻ってきた」という表情の山崎司祭。大仰な山本家と出迎えの人々は思ったことだろう。でも私にとっては、十日間家を離れるのも、フィリピンも、屋根のペンキ塗りに、全てが初体験だった。

マニラの友

ジェームス牧師率いる班は、沖本恭子、松山省太郎、真子義人、山本友美、この四人が一週間をともに過ごす。マニラから北へ三時間。ヌエバ州の教会。私達のお世話をしてくれるのが教会の隣に住むテレサ家族。テレサさんと夫のマルロー氏。フィリピンは英語が公用語だが、私の英語力は中学で止まっている。けれどふくよかなテレサと手をつなぎあっていたら片言でも通じるものだ。教会の庭はあひるや鶏が自由に走り回る。テレサは庭の隅に座るあひるを指し「ダック」と言い、自分のおなかをふくらませる。「ダック?、ベイベー?」テレサが頷く。卵を温めているのだ。二週間抱いていると言う。その数、二十個。もしかしたら今頃は赤ちゃんダックがあひるの庭をヨチヨチ歩いているかもしれない。教会の壁は白のペンキ、屋根は聖公会のシンボルカラー、緑を塗る。この作業は二日を費やした。一時間も作業すると、テレサがス

イカを切って身振りで「休みなさーい」と下から呼ぶ。もともと食が細いし、偏食の私は、このスイカと甘いバナナ、もったいないほどのマンゴーで生き延びた。教会のフェンスからきれいな娘がのぞく。「ハロー」と言って、近づくと「どこから来ましたか」と抑揚のある日本語。「日本の久留米です」応えると「わたしは田主丸に一年間いました」と言うではないか。「えーっ」とこちらが驚く。たぶん田主丸でスナックに勤めていたのだろう。「ずっといたかったけど、親をみないとだめだから帰りました。でもね、フィリピンは一日働いて五百円です。日本のほうがいいですあなたにあえてうれしいです」私の方がどんなに嬉しかったか。マイリーンと名乗った彼女は、私が夜中に蚊がいると言うと、キンチョールを貸してくれた。3月11日、もう一つの班と合流でサガダ州へ向かう時に、ろくに挨拶もしないままに、テレサやマイリーンと別れてしまったことが心残りではない。

バギオでの再会

3月14日にバギオに入る。それまではあちらこちらの聖公会を訪ねた。石造りの教会、松で作られた新しい教会、どんな所を回ったかはいつか写真で紹介できよう。どこの教会も小林司祭の親しみやすさの賜物で心から歓迎されたし、別れの時は走って手を振ってくれた。サガダでは村祭りのダンスの練習にも参加した。得たものは、言葉はなくても、心で通じ合えるということだった。そしてバギオ。ここには15年前に半年間、久留米大学に研修に来ていた、スーザンと再会できるはずだ。スーザンはその当時、厚生省関係の公務員、クリスマスカードだけは交換していたが果たして会えるのか。すると教会に連絡があって14日の夕食に全員を招待すること。午後6時、タクシーが宿舎の前にとまる。「ともみ?」「スーザン?」名前を呼び合い、見つめ、抱きあう。スーザンの温かさは15年前のまま。久々の広い邸内で食事。コーラ、スプライト、和食まがいの鍋焼きヌードル、長いテーブル一杯のご馳走、そしてデコレーションケーキ。スーザンは七十歳近いがとても若々しい。忘れないよ、スーザン。必ずまた家族を連れて会いに行くからね。

報告書、A4一枚なんてとても無理。だけどこれだけは伝えたい。団体行動の苦手なこの私が行けたのだから、フィリピンのワークキャンプは誰でも必ず行ける。ただ

し、健康管理は自分で責任もつこと。自己主張をすること。(私は水で髪をシャンプーしたことがない。もし水で洗えば必ず風邪をひくと確信している。だから「ボイル、ウォーター」とやかに湯をわかしてバケツにぬるま湯を作り洗った)。酔い止めの薬を常備すること。私が切に思ったことです。加えて、現実逃避で行ったフィリピンだったが、日常が恋しくて、家族の有り難味を再認識したことも重要なことでした。

義人のキャンプ日記

眞子義人

2007年3月6日

この日は、フィリピン中央教区の事務所で、歓迎会があった。自己紹介の時に、名札シールをもらって、貼ったんだけど、僕のをよく見ると、『YOSHITO』って書いてあった。・・・あの～、これ、じいちゃんの名前なんですけど～(汗)

3月7日

この日は、班分けと、ワーク先への移動があった。小林司祭と、柴本君と古澤さんと山口さんは、パラヤンのセント・デービッド教会へ。僕と松山君と沖本さんと山本さんは、セント・アンドリュース教会のの牧師館へ行きました。

昼過ぎに、牧師館に到着。荷物を部屋に置いた後、現地の人たちと交流。テレサさん(裏の家のおばちゃん)と共に、トライシクルに乗ったり、テレサさんの友人の家を訪ねたり、その途中でカラマンシーという柑橘系のすっぱい果物を食べたり、サリサリストアーに行ったり、帰りはジブニーに乗ったりしました。

3月8日



この日、ペンキ塗りをはじめの前に僕が、「さっさと
終らせて、さっさと遊ぼう！」と言ったら、山本さんか
ら、「何言ってるの」と言われ、あきれられました。が、
実際には、ペンキ塗りは、さっさと終わりました。

昼過ぎに屋根を塗ってる時には、サンダルが壊れるとい
う悲劇に見舞われましたが、作業が終わった後、ジョエル
さん（裏の家の兄ちゃん）が、「新しいのを買いに、市
場に行こう」と言って、連れて行ってくれました。

夕方、日本の料理を作る事になり、20代トリオ（僕
と松山君と、沖本さん）は、お好み焼きを、山本さんは
浅漬けを作りました。

評判は、ご想像にお任せします。

3月9日

この日は、もう一つのグループが行ってる、パラヤン
のセント・デービッド教会に行きました。
が、別に手伝いとかはしていません。

昼食を食べたり、近々結婚式があるらしいと聞き、その
式場に行ったり、その帰りに寄った家でライスワインを
少し飲んだだけでした。

夕方にカバナトゥアンに戻り、今日も夕食を作った。今
回は『天ぷら』。評判は、すぐに空になった皿が物語っ
ていました。



3月10日

この日は、マロさん（裏の家のおじさん）の誕生日ら
しい。どうしてわかったかと言うと、朝っぱらから、ジ
ョエルさんが、「ハッピーバースデートゥーユー」と大

声で唄っていたからです。

朝食前から始まった、屋根の仕上げ塗りが終わった後、僕
は、ジョエルさんの案内で、近所の床屋に行きました。
床屋の兄ちゃんに「どうする？」と聞かれたときに、松
山君が、「スキンヘッド！」と言ったから、僕は慌てて、
「No! スキンヘッド No! No!」とさげび、何とか、事な
きを得ました。



（床屋に行って髪を切る眞子兄）

床屋を出た僕たちは、近くのサリサリストアーに行きま
した。この店には、カラオケの機械があって、ジョエル
さん、松山君、僕の順で唄いました。（けど僕は、歌詞
がわからなかったので、即興で替え歌を唄いました。）

この日の夜、セント・アンドリュース教会の礼拝に出席し
ました。

礼拝が終わった後、教会に来てた女の子達と話をしていた
のですが、教会に行く前に寄った家で飲んだテンブルワ
イン（度数56%）のせいなのか、頭がボーッとして、
ロクに話せませんでした。

3月11日

この日は、2つの教会に行きました。

1つ目の教会では、礼拝が終わった後、みんなで、『フル
ーツバスケット』をしました。

が、僕は2度もバツゲームをする羽目に・・・（泣）

1回目は、扇子を使って、1分間パフォーマンス。

2回目は、何故か、中学校の校歌を唄いました（苦笑）

2つ目の教会では、礼拝が始まるまで、地元の子どもたちと一緒に遊びました。

礼拝が終った後、教会のとかくの家に泊まりました。

3月12日

この日、昼前に、パラヤンに行っていたグループと合流。その後、サガダに向けて出発。

しかし、道のりは、かなり、キビしかった。

山道、砂利道で、かなり気分が悪い。

途中、昼食時に立ち寄った、セント・ジョーンズミッション（と看板に書いてあった）で、20数年前に父と、P.N.Gワークキャンプに参加した方と、偶然出会う。

その後、バナウェーやボントックにも寄った後、サガダに到着。夕方、宿に荷物を置いた後、近くのレストランにて夕食。

しかし、柴本君は、疲れたのか、食欲がなく、すぐに宿に戻り、僕も、軽く食事を済ませた後、宿に戻りました。

3月13日

未明に、柴本君が、おう吐。

かなり、しんどそうだ。

この日の午前中は、僕と柴本君は宿に残って、寝ていました。

昼頃に、他のメンバーが帰ってきてから、昼食。

お茶漬けを作ってもらい、それを食べました。

その後、宿の1階で買い物をしてから、ピサオに向けて出発。

途中、セント・ベネディクト教会やセント・ジェームズスクールに立ち寄りしましたが、僕は、車の中で、横になっていました。

ピサオ到着。この日の宿は、ロメル司祭の（亡くなった）おじいさんの家だそうだ。

夕方頃、ロメル司祭から、薬をもらって少し楽になった。

3月14日

この日は、ピサオから、バギオに移動。

その途中、土産物屋で買い物したり、セント・メリー教会に立ち寄りしました。

夕方に、宿に到着。

荷物を置いた後、スーザンさんのお宅にて、晩御飯をごちそうになった。

その時に、スーザンさんが、箸を用意してくださったことに感激！

3月15日

この日、僕と山本さんは、ジェームズ司祭と共に、ホリオさんの運転する車に乗り、他のメンバーは、バスに乗って、マニラに向かいました。

ホレブハウスに到着したのは昼過ぎ。

その途中で、ライオンヘッドを見たり、ジェームズ司祭にマンゴーを買ってもらったり、レストランでフィリピン風生春巻きを食べました。

昼過ぎに、ホレブハウスに全員集合。

荷物を置いた後、松山君と小林司祭は、チャイナタウンへ、麻雀セットを買いに。沖本さん達は、モールへ買い物に出かけました。

その頃僕は、部屋で寝ていました。

夕方に、全員そろってから、教区事務所に行き、打ち上げを兼ねた夕食会に参加。

その時に、今回のワークキャンプの感想を言うことになり、僕は、「Many Many fruit ang sarap sarap」と言いました。意味は、「たくさんの果物、美味しかったです」と言った所だろうか。

その後、タクロバオ主教から、卒業証書（らしき物）や記念品をもらった後、記念写真を撮っておひらきとなった。

そして、僕と松山君と柴本君と古澤さんと沖本さんとジェームズ司祭は、ホレブハウスの近くの家に行き、コーラやブランデーを飲みながら、写真やDVD（ビデオCD？）を見せてもらった。

日付が変わる頃に、この家の兄ちゃんと一緒に、みんなで、呑み屋に行き、サンミゲルビールを飲み、バーベキ

ューを食べました。

3月16日

日本に帰る日。

朝、ホレブハウスの玄関前に集まったら、教区のスタッフの方たちが、見送りに来てくれました。

朝食用に買ってくれてた弁当は、食欲がなくて、一口も食べられませんでした。

福岡空港に着いたのは、夜8時頃。

そのときの僕の格好は、半そでシャツに短パンにサンダル。頭に麦わら帽子をかぶっていました。

出迎えに来た人たちは、多分、全員、あきれていたことでしょう。

以上。

報告書、提出期限前日 眞子義人

フィリピンワークキャンプ

古澤はん奈



(サガダの学校の理科教室を見て回る古澤姉)

初めての飛行機で初の海外。ワークキャンプに参加するのは大きな期待とそれ以上の不安がありました。でもその不安はフィリピンの方たちの暖かい歓迎ですぐに無くなり、とても充実した10日間になりました。

3月7日から11日までは聖ディビット教会でのワークで教会内や屋根のペンキ塗りをしました。昼間はとても暑いので主に早朝と夕方に作業を行い、作業をして

いない昼間の暑い時に現地の子供たちと凧揚げをして走り回ったり、夜は宿泊している所に多くの人が集まってみんなで「椰子の実」を小林先生のフルートと、現地のバイオリンおじさんが弾くバイオリンの音に合わせて歌ったり、折り紙講座をしたりしてたくさんの方と交流する事ができ、歳が近い子とも友達になれて嬉しかったです。また現地の結婚式を見た事とヤギを食べた事が忘れられません。結婚式は村中の人が集まって音に合わせて踊ったり、会場の周りには出店みたいなものがあるお祭りみたいでとても面白かったです。ヤギは聖ディビット教会の最後の夜にまるごと1匹料理される過程を見てしまった私はどうしても胃液のスープを食べる事が出来ず、食生活の違いを思い知らされました。

12日からは車で移動して多くの教会を見る事が出来ました。石造りの教会や松の木で造られている教会もあり、また各教会によって絵が違うステンドグラスもとても綺麗で感動しました。他には鍾乳洞の中を裸足で歩いたりバギオでは機織りを見学したり、貴重な体験が来ました。

私の今後の課題は英語が苦手で、伝えたい事がなかなか伝わらない時があり悔しい思いをしたので、もっとたくさんの人と話すためにこれからは英語をしっかりと勉強して次に繋げていきたいと思っています。

初の外国フィリピンにて・・・

柴本啓志



(パラレの村でバナナの皮をむく柴本兄)

自分にとってこのキャンプは、題名に書いたとおり初めての外国旅行でした。飛行機は初めてじゃないけど、空港から出国する時にはどんな事が待っているのかとドキドキでした。

始めフィリピンワークの話聞いたとき、自分はフィリピンについて何も知らなかったの、かなり不安でした。でも、いざフィリピンに着いてみると、現地の方々はみんな優しく歓迎してくれて、不安は吹き飛びました。

そして、フィリピンという国について受けた印象は、地域によって都会か田舎かの差がかなり激しいのですが、田舎の地域は日本の昔の様でした。自然がたくさんあり、夜は電気の光が少なく星がとても綺麗に見えました。現地の皆には活気が有って、発展途上の国ならではのなかと思いました。子供はとにかく元気がよく、ちょっと近くで走ろうものなら本気で追いかけてきたりします(これによってヘトヘトに・・・)。

食べ物は、(このキャンプはやたら食べることが多かったのですが)おいしいのですが、味が濃いうえに、歓迎してもらったからなのかいつもこうなのかかわからないのですが量が多いです。特にごはんが。毎回の食事に皿にめいっぱい盛られていて、そこから取って食べるのですが、毎回余ってたような・・・。

そして山の方では道が当然のように舗装などされていなく、車で何時間もかけて通った道はガタガタ揺れまくって、それが影響したのかただの食べ過ぎなのか胃を壊すハメに・・・(泣)しかも、ワークに行った村で最後の日に飲んだスープが、かなり苦くてマズーと思っていたら、後からそれは山羊の胃をしぼった胃液のスープだと言われ、その後ずっと精神的に苦しめられました・・・。

でも当然悪いことばかりではありません。そのワークに行った村で、偶然結婚式があって、それにみんなで行くことになった時、自分だけ一人が残って居ると、そこに居た2歳年上の子に話しかけられて、つたない英語で必死に答えながら教会まで帰ってきました(ここを小林司祭に見られて感動された)。その後もずっと日本語について聞かれ(日本に興味があるというのもあるでしょうが、現地の子はとにかく勉強熱心でした)、日本語授業は日が暮れるまで続けました(結局はその次の日も)。現地の小さい子達ですが、一緒に遊ばすけど言葉は当然わかりません。最初はそれがすごく歯がゆかったんですが、段々遊んでる内に言葉なんかどうでもよくなっていました。

そして、地方地方では山からのライステラスの景観や、山から覗く朝日、雲海などなど、日本では見ることのできない綺麗な景色がたくさん有って、感動しました。あつという間に過ぎたキャンプでの日々ですが、後から考えてみると10泊11日とかなり長かったです。体力が続

くかと不安だった所もあったのですが、胃を壊した事以外は平気だったので(といってもこれがかかなり辛かったです・・・) 帰ってきたときは疲れてたけど、フィリピンで疲労でぶっ倒れたりしなくてよかったと思います。

最後に、このフィリピンという国は、かなり適当だなと思いました。日本がきっちりとしすぎているのかも知れませんが、山道は普通に崖崩れしてたり、ガードレールなんかも無かったり、自分たちの努力を否定することになるかもしれませんが、塗ったペンキの色がわけわかんなかったり・・・。飲酒についても、規制は無く、未成年が飲んでも何も言われないし(むしろ司祭が薦めてきた) 飲酒運転についても何も問題ないらしいです(司祭が飲酒運転・・・)。それで、自分はきちきちしすぎてつまらない人間になってないかと、自分を見直す事ができたと思います。前述した通り、初めての外国旅行、その上、参加した人の中では最年少で、人一倍不安でした。でも、今考えると、やはり貴重な経験をする事ができたと思います。おわり。

今後の展望とお知らせ

1. 9月にフィリピン訪問ツアー

ワークキャンプが始まった3年前から、「ワークは無理でも、フィリピンの教会を訪ねたい。」という声はあって、ずっと話題にのぼっていました。

それを実現すべく、今年の9月7日(金)~10日(月)五十嵐主教夫妻と一緒にフィリピン中央教区を訪ねる旅が計画されています。費用は約11万円の予定。詳しい内容を近日中にお知らせできると思います。

2. 秋にフィリピンの司祭が来訪予定。

今年もフィリピンから司祭を招き、九州教区のほか、東京も訪ねて、3回の日曜日に説教してもらう予定です。まだ、来る司祭の名前が未定ですが、近づいたら、ご協力をよろしくお願いします。

3. フィリピン協働委員会11月から新しいスタッフ。

3年任期の当委員会は、今年の11月で二期目を終了します。第1期の濱生委員長、第2期の小林委員長に続いて、新しい委員長と委員が任命されて、今後も活動が続きます。

4. 第5回フィリピンワークキャンプ

今年のキャンプは、後半北方への旅も加わって、盛り沢山のよいようになりました。来年は、同じ3月がいいか、中高生も参加しやすいように8月に植林などのワークにするか、など検討しなければなりません。働くだけでなく、人々との交わりができる内容になるように準備を始めます。

今回のキャンプ特集についての感想や質問、意見など、お寄せください。連絡先は、

〒862-0956 熊本市水前寺公園28-14
熊本聖三一教会内 小林史明司祭宛
電話&ファックス 096-384-3202
携帯電話 090-1367-6818
E-mail f-frank@kind.ocn.ne.jp



(椰子の木に登り実を取ろうとしている。)

キャンプスナップ



(椰子の果肉を特別の道具で削っている。パラレで)



(ハンカチのねずみが動いて、子どもに受ける山口姉)



(夕食のため山羊を殺して調理中。パラレ)



(立教大学アジア寺子屋グループと対面・
イフガオ州ナヨンのセント・ジョーンズ教会で)



(バナウェのよりも美しかったライステラスの村)



(サガダの鍾乳洞に入ってゆく)



(出発の朝、パラレの人々が見送りに来てくれた)



(礼拝の後、祭壇に日本酒を置いて、勧めるロメル司祭)



(椰子の実のジュースをストローで飲む)



(フィリピン聖公会のマークを示すジェームズ司祭)



(左から、ジェームズ司祭、ダグソン執事、ダグラス司祭、沖本姉、手前右が山本姉・反省会で)



(結婚式のパーティーでゴングを鳴らして踊る人々)



(山口姉が三味線を披露)



(聖マルコ教会の人々と礼拝の後で)



(テーブルを囲んで一緒に夕食作り)



(今年も、教会の庭で凧揚げをやった)